

『一切悪趣清浄儀軌』における無量寿如来について

中 島 小 乃 美

はじめに

阿弥陀如来、すなわち無量光、無量寿仏については、浄土三部経などの研究を初めとして、数多くの先行研究が見られる。チベットにおいても深く信仰され、従来から多くの研究者が研究対象としてきた。月輪（一九六七）では阿弥陀仏の浸透性という視点から、その影響を五つに分けて指摘し、「1 専ら阿弥陀仏を讃歎している三経一論の如きものと、2 傍らに弥陀を讃歎している経論と、3 少しも弥陀仏に触れていない小乗経典の如きものと、4 殆ど偶然、突発的に表現されて来る、たとえば『楞伽経』の如きものと、5 肯て主尊でもないが、重要欠くべからざる一仏として表現される、例えば密教の五方五智の如来の一仏として取り扱われる場合、等々が考えられる。（中略）突発とか偶然と云う表現は打ち見た所がさようであっても、実は深く弥陀思想が浸潤していたことを物語るものであって、反って浸透性の極めて深いものとさえ、考えるものではなからうか」と、阿弥陀の浄土観が多く、の經典に深く浸透し、影響を与えていることが指摘されている。

この月輪氏の指摘を考えると『一切悪趣清浄儀軌』の中で、阿弥陀、とりわけ無量寿 (śāṃśā med pa) とされる尊格が、この経軌の中でどのような位置づけと役割を担っているかという視点で眺めると、無量寿仏の特徴がより鮮明

になり、月輪氏の言われる阿弥陀思想の「浸透性」の具体的な一面をもより容易に窺い知ることが出来るように思われる。

この経軌はプトン (Bu ston: 1290-1364) の分類でいうと瑜伽タントラに属する。日本でもなじみ深い『初会金剛頂経』に属す経軌であり、説示の目的は、経軌名が示す如く一切の悪趣を救済し尽くすことにある。『初会金剛頂経』が教理の中心を担う存在であるとするならば、本経軌はそのより具体的な働きを示した経軌であるということが出来る。故に本経軌に示される無量寿仏は、自づとより具体的な使命と働きを担うことになる。

ところで、この経軌には荼毘護摩も説かれることから、従来、葬送儀礼に関わる経軌と捉えられてきた。しかしそれがどのようにに仏教と、とりわけ成仏とかかわるのか、その具体性は明らかにされていなかった。筆者はこの研究の中で、死を成仏の一つの機会と捉え、あらゆる神々を仏法の護持者とし、その力を活かして、一切有情を救済し尽くさんとする瑜伽行者の姿をみるように感じた。このような特異な経軌のなかに見られる無量寿仏が、どのような働きを持つかを明らかにすることで、無量寿仏の特性の具体的な一側面を理解する事ができるのではないかと考えた。

先ず、この経軌に説かれる無量寿仏について触れる前に、これ以前の行タントラに配される『大日経』と、瑜伽タントラに配される『初会金剛頂経』に説かれる阿弥陀(無量寿)如来について概観し、次いで『二切悪趣清浄儀軌』における無量寿如来について検討してみたい。

一 『大日経』と『初会金剛頂経』における阿弥陀(無量寿)如来について

『大日経』の中に説かれる大悲胎藏生マングラでは、阿弥陀(無量寿)如来は中台八葉院の西に位置する。「入曼荼羅具縁真言品」の中に「西方の仁勝者、これを無量寿と名づく。持誦者は思惟し仏室に住す」²⁾とあり、これについて『大日経疏』には、「次に西方において無量寿仏を観ず。此れは是れ如来の方便智なり。衆生界は無尽為るを以て

の故に、諸仏の大悲方便もまた終尽なし。故に無量寿と名づく。梵音の爾爾を名付けて仁者とす。また四魔を降伏するを以ての故に、名付けて勝者とす。(中略)この一仏もまた真金の色に作るべし。稍目を閉じて下視し、寂滅の三昧の形に作れ。諸仏も例して是の如し^④とある。このように阿弥陀(無量寿)如来はマンダラの西に位置し、如来の方便たる智慧の象徴であり、衆生を救い尽くさんという大悲の故に、無量の寿命をもつ者としての役割を担っていることが窺われる。^⑤またここでは、色は金色という表記がみられ、のちに赤色で描かれる無量寿如来はこの經典以後の説示からきていることがわかる。

また『大日経』「住心品」には寿命について、「このものにおいて増長せしむることと、業寿が止滅したのも有の芽を復起させんが為に^⑥と述べ、凡夫の分段生死のものも、仏に成ることが約束されている変易生死のものも、更には生命あるものも、ないものも無明煩惱の種子を除き、仏道への芽が生ずるように導かなくてはならないと説かれている。同じく「悉地出現品」には「力波羅蜜の方便を以ての故に、無為仮設……長寿を得せしめ^⑦とある。また、『大日経疏』に「心自在なるを以て説きて長寿とす。此の如くに寿量は即ち是が如来法寿の命なり^⑧とあり、直接無量寿如来との関係性において説かれているわけではないが、寿命は仏法に関わって意味を持つものであると捉えられていることがわかる。

次に『初会金剛頂経』を見てみよう。この經典は瑜伽タントラに配され、チベットにおいても無上瑜伽タントラに大きな影響を与えた点で重要視されている經典である。この經典の示すマンダラは、如来部・金剛部・宝部・蓮華(法)部・羯磨部の五部で構成されており、すべての教理はこの五部に集約され、それぞれ五智を司る仏として、以下の表1-1のようにまとめることができる。

上表の如く、阿弥陀如来は西方に位置し、妙觀察智を象徴した尊形として赤色で表される。更にまた『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』には、「阿弥陀は孔雀座に座す^⑨と説かれており、そこからも阿弥陀如来の特性を見ることができ

表-1 『金剛頂経』における五部構造

部族	尊名	智慧	方向	色
如来部	ヴィルシャナ (Vairocana) 如来	法界体性智	中央	白
金剛部	阿闍 (Akṣobhya) 如来	大円鏡智	東	青
宝部	宝生 (Ratnasambhava) 如来	平等性智	南	黄
蓮華 (法) 部	阿弥陀 (Amitabha) 如来	妙觀察智	西	赤
羯磨部	不空成就 (Amoghasiddhi) 如来	成所作智	北	緑

D.197b, P.233b

る。

—ところで『初会金剛頂経』は最後に教理品といわれる、重要概念を偈頌に集約した章がある。その中の蓮華部、すなわち阿弥陀如来の妙觀察智を司るところでは、三摩地が説かれるが、この「如来部標幟執持成就秘密教理」の中に阿弥陀如来とそれを囲む四菩薩、即ち、金剛法菩薩・金剛利菩薩・金剛因菩薩・金剛語菩薩（法・利・因・語）の四菩薩についての説示があり、これらの菩薩の深秘積を見る事で、阿弥陀如来の特徴が明らかになると思われる。「貪欲清浄の故に蓮華（法）であり、敵なる煩惱を破すから剣（利）である。マンダラの道理の故に輪（因）であり、言葉で述べるから語といわれる」^⑩とあり、これについて、この經典の註釈者の一人であるブツダグヒヤ (Buddhaguhya)^⑪は三摩耶印を解釈する中で、此の偈を引用しその根拠にしているが、この註釈に対して解説を行ったパドマヴァジュラ (Padmavajra) は、この偈について「貪欲清浄の故に蓮華（法）とは、蓮華は淤泥より生じて泥の過失に染着せられないごとく、大悲で趣の利益をなされても、生死の罪過にも染着されないこと。敵なる煩惱を破するから剣（利）であるとは、譬えば世間の武器である剣で敵や反対する者の命を切断するごとく、智慧なる「利」剣でその「敵」のごとき煩惱と「悪」の網を裁断することである。マンダラの道理の故に輪（因）であるとは、発心するや否や法輪を転ずること、敵の相続に法輪を転じて因縁和合して生死輪廻の相続を断ずることである。言葉で述べるから語と言われるとは、所化の相続と適合して、聖教や教証を説法して他者を解脱させることである」と解釈している。このように、阿弥陀如来は妙觀察智を象徴し、生死輪廻に着し法（智慧）を説き続ける存在として位置づけら

れている事が知られる。

また阿弥陀如来は、従来より無量光・無量寿として表されてきたが、それについてもパドマヴァジュラは「牟尼なる無量光とは、「第六」識（すべてを統御し意識し判断するもの）を転じた妙觀察智で、その智の三摩地門を加持し示されたものが無量光である。なぜならば、寿 (āyus) と光明 (ādha) とが無量 (amita) 「なる性質を」を具えるものであるからである。その「無量光」の眷属となる四大薩埵の出生は金剛法 (vajradharma) などで、金剛法とは、無量寿如来の妙觀察智の自性が法界を縁じつつ各々を觀察する功德が金剛法觀自在 (avalokiteśvara) と名づけられるこの薩埵として「加持し」示された。文殊とは、法界を如実に証得して、所知障と煩惱障とを断じた功德が、金剛利文殊 (mañjuśrī) と「ごうご」の薩埵として「加持し」示された。纒發心転法輪 (sahasrītopādadharmacakrapavartin) とは、語金剛無尺莊嚴で一切三界に対し、特別な因となる功德が、金剛因¹³ というこの薩埵で加持し示されたものである。秘密語 (sandhivāda) とは、語無尺莊嚴で一切三界に対し、覚知し (anubodhana)、語としての法を演説する (pravādana) 功德力が、この金剛語という薩埵で「加持し」示された¹⁴ と述べている。これらの事から、阿弥陀 (無量光・無量寿) 如来は、『初会金剛頂経』において妙觀察智を象徴し、輪廻に著して説法し続ける薩埵 (satva) を従えた存在であるという事が指摘される。それはまた、阿弥陀如来の印が最勝の定印であり、色身は泥中であつて淤泥に染まらない蓮華の如く、どこまでも衆生に着しながらも、自らは清浄な赤蓮華のごときものであり、その象徴である敬愛の赤色で表されていることから窺い知る事ができる。

さらにこの「教理品」の終わりに護摩法が説かれるが、その中に長寿の護摩がある。經典には、「諸々の甘き柴木を以てまた、賢者がよく火を燃焼させ、Dhruva の蔓に酥油を伴い、焼「供」したら寿命は増長するであろう¹⁵」とあり、BG はこれによって「自ら、或いは他人の寿命は長くなるであろう¹⁶」と解釈し、その真言が「om vajrayuse svaha」であるとして結んでいる。

また『初会金剛頂經』に属する『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』にも類似偈がある。「甘き柴木を以て……現に金剛寿命が現に増長するであろう」とあり、別の所にも「甘き柴木と、同じく *Durva* の芽などに酥油を注入し、金剛印を以て焼〔供〕したら最高に寿命は増長するであろう」と説かれている。このように寿命は、単なる長寿としてではなく、金剛の寿命であり、金剛薩埵として永遠に衆生済度し続ける寿命であると捉えられていることがわかる。

二 『一切悪趣清浄儀軌』における無量寿について

(一) 本経軌の無量寿マンダラの位置づけ

本経軌には、その説示の目的からそれぞれ機能別にマンダラと護摩が説かれている。この十二種のマンダラと四種護摩と荼毘護摩について、ブツダグヒヤは世間と出世間に配釈している。それをまとめると以下の表一・二になる。

この表の中に、「無量寿」の名のつくマンダラが二つある。一つは、「断無量業寿マンダラ」(she dpag med kyis las kyi sgrub pa rgyun good pa i dkyil khor) と、「無量寿ヤマインタカマンダラ」(she dpag med gshin rje joms pa i dkyil khor) である。これらは共に出世間のマンダラとして解釈されており、断無量業寿マンダラは、*mūṛa-tantra*、*uttara-tantra*、*uttara-tantra* からなる経軌の、*uttara-tantra* の釈迦牟尼如来を中心とするマンダラの説示の後に説かれ、無量寿ヤマインタカマンダラは *uttara-tantra* の最後、十番目に説かれている。この *uttara-tantra* は、世間の神々を中心に、より具体的な働きを示すマンダラが説かれる所であり、無量寿ヤマインタカマンダラは、後 *uttara-tantra* の直前、無上瑜伽タントラを彷彿させるような忿怒、愛を表すマンダラのその直前に説かれている。では具体的にどのような目的で説かれているかを見ていきたい。

表-2 BG 所説 経軌の全体構造とマンダラと護摩の関係

タ ン ト ラ	因縁 (序 分)	因縁(通序)	<ol style="list-style-type: none"> それを説いた処、 誤り無い説の教主、 清浄な眷属、 誤り無い結集者、 それが説かれる動機(後には時とある) 			
		特殊因縁(別序)	教主が実例を挙げる事(後には教主による緒論とある) 眷属の緒論			
	経 (正 宗 分)	法性より不動の意の象徴としてマンダラを示現	出世間	<ol style="list-style-type: none"> 因の菩提心の分別門において、果たる智慧の六種行・六波羅蜜が六種のマンダラと共なる点から六因で障碍を浄めるため 	<ol style="list-style-type: none"> 根本は菩提心に集まる象徴 悲は悪趣の因果を破す 悪趣の業と寿の障碍の相続を断つ 四魔降伏 四種作業門から趣の利益 兇悪者の調伏 	<ol style="list-style-type: none"> 大マンダラ 八〔仏〕頂マンダラ 断無量業寿マンダラ 无量寿ヤマーンタカマンダラ 四部族転輪マンダラ 金剛忿怒火焰マンダラ
			世間	<ol style="list-style-type: none"> 世間的欲望を満たし喜びに入らしめるため 世間に一致するため 	<ol style="list-style-type: none"> 世間の魔鬼を滅す 八方の魔鬼を滅す 曜星のたたりを滅す 龍毒を滅す 世天の不喜を滅す 天の魔鬼を滅す 	<ol style="list-style-type: none"> 四天王マンダラ 十護方マンダラ 八曜マンダラ 八龍マンダラ 八大天マンダラ 八ヴァイラバマンダラ
タ ン ト ラ	趣(有情)の利益をなされる象徴として護摩を示現	物への執着を退かしめるため		物に対する見解を破す	荼毘護摩	
		<ol style="list-style-type: none"> 悲円満の故に趣の利益をなされる四種護摩 五煩惱を浄める 	<ol style="list-style-type: none"> 法性より不動の意の象徴 趣の利益 生死(輪廻)を自在に操る 兇悪者の調伏 	<ol style="list-style-type: none"> 息災護摩 增益護摩 敬愛護摩 降伏護摩 		

D.152b-154a, P.180b-182b

三 断無量業寿マンドラについて

(一) マンドラ説示の目的

実際にマンドラが作られる時、前述の二者は同一視されるようで、後者の無量寿ヤマインタカマンドラの構成の例が多い。しかし経軌には、この二つのマンドラの説示の目的が説かれており、それぞれ特徴がある。

先ず断無量業寿マンドラについて概観してみたい。

このマンドラは帝釈天を初めとする天部の神々が、世尊の三摩地に等至し、教えを語る金剛手に対し、一切有情が無病と長寿と福德を得るためにはどのようにしたらよいか説示を請う。その状況を要約すると以下ようになる。

- a 一切有情の無量の寿命が普く出生する金剛三摩地に等至、心真言を出生↓脱有情地獄、仏の十二作業¹⁸、一切如来の意の法の文字に入る
- b 無量寿の金剛光明をなす三摩地に等至、陀羅尼を出生↓一切有情の苦が息滅
- c 障碍を摧破する三摩地に等至、心真言たる陀羅尼を出生↓一切有情の苦が息滅
- d 一切障碍の垢をなくし、完全に清浄にする三摩地の等至、陀羅尼を出生↓一切の魔の場処を破壊
- e 一切の障碍を決定的に覆い隠す三摩地に等至、陀羅尼を出生↓一切世界が正しく振動¹⁹

この三摩地に等至し、真言や陀羅尼を出生していく過程の中で、有情地獄から脱する事を、如来の意たる法の文字に入るといふ状況を説いている点において、業寿を滅ずるといふことは、法に依るといふ事を表し、更には一切有情が正しい世界、即ち如来の法を聴く世界に生まれる事を意図していることが知られる。

そして、このマンダラを描き、成就法²⁰を修習することによる功德は、「兆しが如実に出現すれば、月と日（太陽）が存在する限り寿命が延びて金剛と等しくなつて、以後、後世に成ずること疑いなし。兆しが現れないときでも、世間において無病で、俊敏で白髪や皺がなくなるであろう。身体堅固にして百才の寿命を得るであろう。他にまた念誦したのみで息災と増益と敬愛〔護摩〕などの所作業を考える必要はなくなること疑いなし」と説かれ、念誦するだけで辺境の地に生まれて苦勞する事なく、健康で長寿を得られることが説かれるが、あくまでもその寿命は正しい仏法を得る目的であることは言うまでもない。しかし白髪や皺がなくなり、長寿を得るといふ世間の願いを否定する事なく汲み取つて、出世間へと導く方便とするところに密教の特色を見る事が出来る部分であろう。次に、註釈者はこのマンダラをどのように捉えているかを見てみたい。

(二) 断無量業寿マンダラの解釈について

『一切悪趣清淨儀軌』には大部な註釈が四つある。このなかで『大日経』と『初会金剛頂経』を註釈したブツダグヒヤの註釈を中心に、マンダラの意味について考えてみたい。

先ずブツダグヒヤは、断無量寿マンダラ（無量の業寿の障碍を断ずる）ということについて解釈している。「寿とは、識である。無量とは一切の法を離れていることと同義。業とは、善と悪の二種、障とは、明淨虚空を雲が覆うように、阿頼耶（ālaya）を客塵なる分別によつて障碍すること。相続を断ずるとは、対治（能断）の聖道の智力で不一致の見解の相続を断ずると同義」と断無量業寿の字義釈をし、続いてマンダラの語義解釈をする。すなわち「manda dki'iは無量なるその法性、ka'khorとは大で、四智の眷属である」とし、中心は法性そのもの、周囲の輪は眷属であると解釈されている。ブツダグヒヤの解釈するマンダラの配置を見ると、中心は金剛手であり、その回り東西南北を四仏が取り囲んでいる（表—3 参照）。

表-4 マンダラ構造

場処	深秘釈
四角	四種作業で趣を利益
四門	無量の四種作業で趣を出発させる門と、四摂事で大悲をなす形
守門者	智慧の光の印
四下馬台	悲なる四無量心
臍中央宮殿	法性
四輻	四智御作業

D.197b, P.233b

表-3 断無量業寿マンダラ

尊名	方向	色	尊形
金剛手	中央	緑灰	満月の如き顔で微笑、左手金剛、右鈴諸飾り
阿闍	東	白	三界保護の相不動、触地印
宝生	南	[黄]	最勝施印(与願印)
阿弥陀	西	赤	定印
不空成就	北	緑	施無畏印

D.197b-198a, P.233b-234a

ここで注目すべき事は、このマンダラが無量寿を主題としながらも、中心尊は夜叉の主とされる金剛手で、無量寿如来は従来の金剛界マンダラと同じ西に位置している。という事は、金剛手が世尊ヴィルシヤナの三摩地に等至し、如来の本誓を自らの本誓とし、その働き手となっている構造を示している。そしてまたなぜ夜叉の主がマンダラの中心尊になり得るのか、という疑問が起る。これについて、前述した経軌の流れを振り返ると、帝釈天を初めとする天の神々が世尊に教えを請う場面がある。このとき天部の神々はその語り手である金剛手を十の名前で称讃する。それについて、ブツダグヒヤは「金剛手は、夜叉であり普賢であるから、夜叉の語で十波羅蜜などの功德の門から讃嘆する」と解釈している。そして「それは断無量業寿のマンダラを説くことの啓請と同義である」としている。夜叉である金剛手は、金剛の名号を冠し、普賢の特性を具えた存在であり、ブツダグヒヤはその十名にそれぞれ十波羅蜜を配し、大乘の実践を積んだ者として解釈している。そのような金剛手が、世尊の三摩地に等至し、このマンダラを説示するのである。そして、先述した a e の等至した三摩地についてブツダグヒヤの解釈を要約すると、一切如来の意の法の文字に入ることについては、「五智の自性で、法は十二の御作業の仕方御作業がなされたこと」とし、無量寿の金剛の光明については「清浄智は事物を離れているから無量、金剛の如く無為であるから悲の光明」とする。また決定的

に障碍を摧壞し、覆い隠すことについては、「障碍とは煩惱である。摧破とは一切の相を摧壞すること」とする。垢をなくして完全に清浄にするは、「垢とは、所取・能取の習氣」とし、覆い隠すとは「悲と御作業で他者を覆い隠す」とし、「五部の心真言で部族と瑜伽する」と結んでいる。ここからもわかるように、一切有情が障碍を離れて無垢なる存在となり無量の寿命を得るという事は、五部族の仏と一体となる、瑜伽者として成就することを目的としていることが窺われる。またここでの金剛手は、表―3 にみられるように柔和尊であり、業寿を滅する事に対し、般若の智慧を象徴する普賢たる金剛手が、智慧を以て煩惱の垢を断じて行くことと捉える事が出来る。

四 無量寿ヤマーンタカマンダラについて

(一) マンダラ説示の目的

このマンダラは、世間のマンダラが説かれる最後の十番目に説かれるが、ブツダグヒヤはこのマンダラを出世間のマンダラに配している。

経軌は、金剛手が微笑まれ、自身の集会者をご覧になられ、集会者を振動し、燃やし、遊戯させ、多くの稀有なるものを顕現したところから始まる。梵天をはじめ、諸天は何故具徳金剛手が微笑まれるのか、その意味を請う。すると具徳は「摧壊死主と、非時死息滅の大威光明咒が聴きたいか」と問う。すると天部衆は一樣に、短命の有情を長寿にすることや、脱非時死、脱悪趣、輪廻に恐怖する有情の救済のために説示を請う。そして金剛手は、自身の身口意金剛から一切如来の諸心真言を出生した。即ち、a 心真言の明咒、b 親近の真言の明咒、c 親近の明咒、d 心真言を正しく勧請する明咒、e 第一の心真言、秘密の心真言〔を出生したの〕である。²²⁾ 次いでマンダラが説かれ、その配置は以下のようになる。

中心—無量寿如来（寿と福智資糧とを具える威光無量王如来、心真言 HUN）

東—金剛手（HRH）

南—虚空蔵（TRAM）

西—普観自在無畏施（HRFM）

北—忿怒者（KRAM）

そしてマンガラの成就法の関わり、三摩耶（samaya）を述べる際に、以下のような違逆方便が用いられている。

賢者は、三宝と仏説を加害するものと

ラマを誹謗することに励むものたちを努めて殺すべし

悲ある真言賢者は、三摩耶に敵意を抱く者達を真言を以て殺すべし

慳嗔者たちの財産を盗り、困窮せる有情に与えるべし

……中略

有情たちに利益するためと、ラマの財産と、生き物の命を守るために妄語を語れ

仏を歓喜させるためと、諸三摩耶を守ることと

真言明呪を守らんために、他人の女に耽るべし

金剛薩埵の位に住して、全てをなして、あらゆるものを喰っても

成就なされ、過失とならないならば、悲を具えるものにおいてはいうまでもない。²³

と説く。

そしてマンダラに入り灌頂を授かる功德を以下のように説く。「彼の有情たちは長寿となり、福德を離れた人達は福德を具えるものとなり、悪趣より解脱するものとなろう。ああ天子たちよ、既に悪趣に生まれた彼らの名を灌頂せよ。影像を灌頂することをなせ。チオルテンにも灌頂せよ。——中略——従僕にも灌頂せよ。七夜マンダラに引入すれば決定的に七日で悪趣の障碍より解脱するであろう。彼の天子たちの名をなのつて、二万、或いは三万、四万、十万、百万遍に至るまで唱えたならば、五無間業をなしたのもでも解脱できるならば、罪少なき諸天女においては言うまでもない」と説かれる。

以上のことからこのマンダラ、及び成就法では、特に非時死にともなう悪趣に対してその息滅法を説いており、その方便として強烈な違逆方便を用い、さらには護摩法が説かれている。先に説かれた断無量業寿マンダラでは、念誦のみで護摩は必要ないとしているが、このマンダラについては護摩法と違逆方便を説くことから、業寿の中でも特に非時死の息滅に主眼をおき、そのためにより強力な方便を必要としていることがわかる。それはまた、中心の無量寿如来の心真言が HṚṢṢ といふ金剛手・金剛薩埵の忿怒を象徴するもので表されていることから窺い知る事が出来る。通常、阿弥陀如来の心真言は HṚṢṢ である。しかしこの場合、東の金剛手に HṚṢṢ の心真言が与えられ、中心の無量寿如来はむしろ金剛手の HṚṢṢ という心真言で表されている。後の無上瑜伽タントラになると主尊の交代が見られ、中心がヴィルシャナ如来から阿閼如来へと交代するが、その萌芽が心真言の交代といった形で行われていることも興味深い。

次にこの部分の註釈を見てみたい。

(二) 無量寿ヤマーンタカマンダラの解釈について

ブツダグヒヤは、具徳金剛手が微笑まれたことについて、「象の瞥見(viliḥita, che'i ha stangs)」で普くご覧になられて、御顔は微笑まれ、黄金のようになって、光により世間を照らされた」と解釈している。

「振動とは外は所取の境を捨て、内は能取の心を捨てたことであり、燃やすとは、最高の世間法で内なる能取の心を棄てたこと、初地の見諦は見道であり、世間の相をよく摧破することであり、遊戯とは、十地の法雲「地」を得たことよって、また果たる悟りを得たから遊戯するのである」とする。また稀有なるものを顕現したことについては、「兜率天位から世間の人の境界に降臨されて、「仏の」十二の御作業の理趣を現等覚されたことと同義」としている。これは釈尊の成道の有様を金剛手のそれと同様なものとして解釈し、示しているのである。これは密教が絶えず示して来た姿勢であり、仏教から離れたものとしてではなく、あくまでも基本に立ち返りつつも、常に仏法の働きである方便に主眼が置かれ、瑜伽行者の修法として、インド社会に浸透していたヒンドウの神々をとりこみながら、仏教としての様々な形態を模索していた現れではないかと考えられる。

ところでブツダグヒヤはマンダラ説示の目的を「有情の非時死による畏れを対治するため」と解釈しながらも、ここではマンダラ義の詳細な解釈を示していない。そして「眷属たちが奉献した」心真言と、マンダラを描く方便と、本尊を勧請することと、「阿闍梨」自身が観自在を成ずれば悉地の兆しで、歓喜することと、執金剛女の印を縛して弟子を導入することと、三摩耶(samaya)を犯した場合、殺すことは易しいので述べない」として、経軌に詳細に説かれている三摩耶については省略している。この経軌の中で三摩耶が説かれているところは、*mūla-tantra*の普明ヴェルシヤナのマンダラと、この無量寿ヤマーンタカの説示のところである。普明ヴェルシヤナマンダラに説かれる三摩耶は、酒、肉を摂らないことや、外道たちから誹謗されることが説かれ、越三摩耶については「三摩耶を越えれば直ちに「頭は」破壊され、死に、執金剛仏は忿怒を以て七代に亘って種族に加害する」と説かれている。*mūla-*

tantra)では従来からの三摩耶が説かれ、 uttara-tantra の最後に違逆方便としての三摩耶が説かれていることは、経軌の構造を考える上で重要な点であると思われる。にも関わらず、ブツダグヒヤは詳しい解釈は行っていない。これがブツダグヒヤの意志か、チベットの訳経事情によるものなのかは判断し難いが、いずれにしても無上瑜伽タントラを示唆する内容が説かれている点は注目に値する。そしてこの強烈な方便によって、逆に非時死を伴う業寿を減する事の困難さと、それに真つ正面から向き合った、如来の本誓を吾が本誓とした瑜伽行者の姿を見ることが出来る。それはまた、この無量寿如来の心真言が HUN であることから窺い知ることが出来る。通常 HUN という真言は金剛薩埵を象徴する忿怒の真言である。無量寿如来を中心としたマンダラを説きながらも、金剛薩埵を象徴する真言を示しているということは、無量寿如来に業寿を減するより具体的な働きを託したマンダラと捉えることができる。それは先に説かれた断無量業寿マンダラの主尊が金剛手であったことも関係していると考えられる。即ちこれらのマンダラにおいて、無量寿如来の誓願を、金剛の寿命をもつ金剛薩埵が自らの誓願として、非時死にいたる業寿を減するために働き続けているということの意味しているのである。

続いてブツダグヒヤは成就法について解釈する。経軌には「一切の諸法は無実体であることを、心で観念して、阿(A)³⁰より月輪を思念し³¹」とあり、この部分をブツダグヒヤは五相成身観として解釈している。即ち、「1 通達菩提心、2 修菩提心、3 成金剛心、4 証金剛身、5 仏身円満を観念し、三摩耶印によって身が大印に住する四仏(阿闍・宝生・阿弥陀・不空成就の如来)として加持し、次いで五部の印(如来部・金剛部・蓮華部・宝生部・羯磨部)で加持する。この五部の真言を、頭頂・口・左後頸部・後頸部・右後頸部に「布置し」³²、垂巾の灌頂を終え、本尊の身と成って成就する³³」と解釈し、「その他の灌頂や功德は容易なので述べない³⁴」としている。ここで『初会金剛頂経』の最初に説かれる、一切義成就菩薩たる釈尊が五相成身観をもつて金剛界如来となつてゆく有様を以て、この無量寿ヤマーンタカの成就法としているのである。それは、単に非時死の息滅を三悪道からの解脱と捉えているだけではな

く、仏と成ることまでを視野に入れて説かれており、そのための方便として護摩の儀軌が必要になる。

ここでは四種護摩（息災・敬愛・増益・降伏）儀軌について解釈される。この経軌の中で護摩が説かれるところは、*mūla-tantra* の茶毘護摩、及びこの無量寿ヤマンタカマンダラと後 *utara-tantra* の二つのマンダラに伴う儀軌として説かれている。

このマンダラに伴う護摩儀軌は、息災護摩 (*śāntihoma, zhi ba sbyin sreg*) は、茶毘護摩を想定して解釈されており、「白芥子と名前と各真言を混ぜて焼供する。または身体、屍骸を焼いた灰、クンクマ、柃檀、米、糖菓を焼供すれば速やかに悪趣より脱する」とされている。また増益護摩 (*pausīkahoma, rgyas ba sbyin sreg*) の目的は、「吉祥と威嚴を増長し、廣大にすることであり、貧しい有情たちを樂にするために説示された」と解釈され、此の護摩により「長」寿と幸せ、威光、樂の享受を増益する」と解釈している。敬愛護摩 (*vaśīkaranahoma, dbang sbyin sreg*) の目的は、「兇悪者を敬愛（征服、*vaśāntikara, dbang du sdud pa*) するためと、貪欲を持ち、煩惱に覆われているものを利益するために愛の方法で敬愛させ、大乘に発心させるため」とする。降伏護摩については、ブツダグヒヤは解釈をしていない。経軌には他の三つの護摩と同じように説かれているが、降伏行はよほどの場合しか行われぬ。この場合、註釈に不説としたこともそういった事情によるものか、この経軌が伝わった当時のチベットの訳経事情によるものかは判断し難い。経軌は降伏護摩を説示した後に「これらの次第は存命中にすべきであって」と説いていることから、茶毘護摩以外は有命者を対象にしていることが窺われる。

これらの護摩儀軌からわかるように、ここでの護摩の目的もあくまでも寿命に関わるものであり、最終的には仏果を得るという目的のもと、これらの修法が行われるのである。

まとめ

以上、密教における阿弥陀(無量寿)如来について『一切悪趣清浄儀軌』を中心にみてきた。この経軌の中にみられる無量寿仏は、特に寿命という点から、より具体的にその役割を一手に担い、一切有情を救済し尽くすという仏の本誓に従い、非時死に至った有情をも視野に入れ、この仏の名のもとに壮大な救済論を展開している。しかしその目的は単なる長寿を得ることのみではない。密教が求めるのは、如来法の寿命たる金剛の寿命であり、その寿命は如来の誓願を吾が誓願として衆生済度に向かう金剛薩埵としての寿命であるということができようであろう。その意味からも阿弥陀如来の浄土観は密厳国土としての道場観につながり、仏の永遠の命を生きる金剛薩埵として、秘密真言行を行ずる菩薩道へと発展していったと言える。

【参考経軌】

『一切悪趣清浄儀軌』

Sarvavidurgatiparisodhanatejorājavatthāgatarhatsamyaksambuddhasyukalpanama.

De bzhin gshigs pa dgra bcom pa yong dang par rjogs pa'i songs rgyas ngan song thams cad yongs su sbyong ba gzi brjod kyi rgyal po'i rtag pa.
(D.No.483. ta, P.No.116. ta)

T. Śāntigarbha, Jayaraksita

『一切悪趣清浄字義釈』

Durgatiparisodhanarthavārttikānāma.

Ngan song sbyong ba'i don gyi br'u gyal. (D.No.2624. cu, P.No.3451. ku)

A. Buddhaghosya

『大日經』

大毘盧遮那現等覺神變加持經 善無畏・一行記 (T.18.No.848)

Nahāvāraṇābhīṣambhōdhirīkuraśāhīṣhānacūpūlyasūtrāraṇāmanadharmaparivāya.

rNam par swang mdzad chen po mngon par rdzogs bar byang chub pa rnam par sprul pa byin gyis rlob pa shin tu rgyas pa mdo sde'i dbang po'i

rgyal po zhes bya ba'i chos kyi rnm grangs. (D.No.494. tha, P.No.126. tha)

T. Śīlendrabodhi, dPal brtsegs

『大日經疏』

大毘盧遮那成仏神變加持經疏 一行記 (T.39.No.1796)

『初会金剛頂經』

仏説一切如来真実撰大乘現證三昧大教王經 施護等訳 (T.18.No.885)

Sarvatahāgatātattvasaṅgrahanāmamahāyānasūtra.

De bzhi gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsduṣ pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo. (D.No.479. nya, P.No.112. nya)

T. Śradhdhākaravarma, Rin chen bzang po

『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』

Vajrasekharamahāgyayogatantra.

gSang ba nam 'byor chen po'i rgyud rdo rje rtse mo. (D.No.480. nya, P.No.113. nya)

堀内寛仁『梵藏漢対照・初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇』上・下、密教文化研究所、一九八三、一九七四年。

【参考文献】

北村太道『「[antrābhāvatāra]を中心とした「金剛頂経」の研究（5）」』『密教学』11、一九七四年。

北村太道『「[antrābhāvatāra]を中心とした「金剛頂経」の研究（21）」』『密教学』34、一九九八年。

北村太道『「[antrābhāvatāra]を中心とした「金剛頂経」の研究（再3）」』『密教学』39、二〇〇三年。

高崎直道『インド古典叢書 宝性論』講談社、一九八九年。

武内紹晃、ツルティム・ケサン、小谷信千代、櫻部建『浄土仏教の思想 第三卷 龍樹・世親、チベットの浄土教、慧遠』講談社、一九九三年。

タントラ仏教研究会 a 『「金剛頂大秘密瑜伽タントラ」和訳（4）」』『密教学』38、二〇〇二年。

タントラ仏教研究会 b 『「金剛頂大秘密瑜伽タントラ」チベット文校訂Ⅲ』『種智院大学研究紀要』3、二〇〇二年。

月輪賢隆『阿弥陀仏の浸透性』『大原先生古稀記念 浄土思想研究』永田文昌堂、一九六七年。

中村瑞隆『藏和对訳 究竟一乘宝性論研究』財団法人 鈴木学術財団、一九六七年。

R・A・スタン著、山口瑞鳳・定方晟訳『チベットの文化』岩波書店、一九九三年。

註

① チベットでは、グライラマは観音の化身とされ、観音は阿弥陀如来の化身である。また観音はチベット人の先祖としても身を現じ、最初にチベットに仏教導入したソツツェンガムボ王も観音と化身とされており、その像の頭部には阿弥陀仏がついていることから、チベット人と阿弥陀仏の関わりの深さを窺い知ることができる。

② 西方仁勝者 是名無量寿 持誦者思惟 而住於佛室、T18.p.5a°

- ⑬ tub pa 'od dpag tu med pa zhes pa ni / yid kyi mam par shes pa las gyur pa so kun tu rtogs pa'i ye shes te / ye shes de'i ting nge 'dzin gyi sgor byin gyis brlabs te / bshn pa ni 'od dpag tu med pa'i de bzhin gshegs pa sie / ci'i phyir zhe na / 'ishe dang 'od dpag tu med pa dang ldan pas na'o / / de'i 'khor du gyur pa'i sems dpa' chen po bzhi 'byung ba ni rdo rje chos dang zhes bya ba la segs pa mams te / rdo rje chos ni snang ba mtha' yas de bzhin gshegs pa so sor kun tu rtog pa'i ye shes kyi rang bzhin chos kyi dbyings la dmigs shing / so sor rtogs pa'i yon tan ni rdo rje chos sbyan ras gzigs dbabg po zhes nya ba'i sems dpa' 'dir bstan pa'o / / 'jams dbyangs dang zhes pa ni / chos kyi dbyings ji la ba bzhin du rab tu chud nas / shes bya dang nyon mongs pa'i sgrub pa rab tu good pa'i yon tan ni / rdo rje rton po 'jam dbyangs zhes bya pa'i sems dpa' 'dir bstan to / / sems skyed ma thag tu chos kyi 'khor lo bskor ba dang zhes pa ni gsung mi zad pa'i rdo rje rgyan gyis khamsum thams cad du khyad pa'i rgyur gyur pa'i yon tan ni rdo rje rgyu zhes bya ba'i sems dpa' 'dir byin gyis brlabs te bstan pa'o / / dgongs pa smras pa zhes pa ni / gsung mi zad pa'i rgyan gyis khamsum thams cad du khyab par chud pa dang / gsung gi chos rab tu sgrogs pa'i yon tan gyi mthu ni rdo rje sbra ba zhes bya ba'i sems dpa' 'dir bstan to / / (D.208a-b, P.224b-225a)
- ⑭ 吉木為柴并蜜用 行人作火熾燃 吉祥草及珊瑚枝 與酥增壽命、大正18 p.387a, P.76b°
- ⑮ D.89b, P.96b.
- ⑯ D.269a, P.296b.
- ⑰ D.168b, P.191a.
- ⑱ つの十二の御作業にうつは『宝性論』菩提品第二の中に以下のように説かれており、その取意を引用したと思われる。
- thugs rje chen pos 'jig rten mkhyen // 'jig rten kun la gzigs nas ni // chos kyi sku las ma g-yos par // sprul ba'i rang bzhin sna tshogs kyiis // skye ba mngon par skye ba dang // dga' ldan gnas nas 'pho ba dang // lhumu su 'jig dang bltans pa dang // bzo yi gnas la mkhas pa dang // btsun mo'i 'khor dgyes rol pa dang // nges 'byung dka'i ba spyod pa dang // byang chub snying por gshegs pa dang // b'dud sde 'joms dang rdzogs par ni // byang chub chos kyi 'khor lo dang // mya ngan 'das par gshegs mzdad nas // yongs su ma dag zhin mams su // srid pa ji srid gnas par ston // (D.No.4024, phi.64b, 中译 1986, p.169-170, 高僧 1989, p.156)

- ①9 D.74b-75b, P.70a-71a.
- ②0 この成就法の中に「それらの標幟が出生した時、酥油あるいは新しい酒、あるいはごま油、或は水、乳、酪、酒、血、凝血、脳髓、肉あるいはいはずれかしかるべきをよく成じ已って……(D.76b, P.71b)」と、「左手に三結の印を、右手は虚心合掌し、世尊・無量寿を観念する」という表記があり、後の無上瑜伽タントラに見られる、血、肉、酒というモチーフと、金剛薩埵の姿をとる金剛手が三結の印をとることが出世間のマンダラの成就法のなかに登場している点が興味深い。
- ②1 D.76b, P.71b.
- ②2 D.82b-83b, P.78b-80a.
- ②3 glen pas dkon mchog gsum sogs dang/ /sang^s rgyas bstan la gnod byed dang//
bla ma smod la brtson pa nam^s/ /mkhas pas bsgrims te gsad par bya//
chos min ldan dang sdig spyod dang/ /rtag tu sems can gnod brtson dang//
dam tshig sdang nam^s snying brtse ba'i/ /sngags mkhan gyis ni sngags k^{yis} bsad//
jung^s pa nam^s kyⁱ nor blangs la/ /sems can phongs la sbyin par bya//……
sems can nam^s la phan spyod pas/ /rtag tu dam tshig bla ma'i nor//
srog chags srog ni bstrang ba'i phyir/ /brdzun du yang na smri bar bya//
sang^s rgyas nam^s ni myes bya dang/ /dam tshig nam^s ni bstrang ba dang//
sngags rig pas ni bstrab pa'i phyir/ /gzhan gyi bud med bsnyen par bya//
rdo rje sems dpa' gnas 'dug nas/ /thams cad byas shing kun zos kyang//
'grub 'gyur ny^es par mi 'gyur na/ /snying rje^r ldan pas smos ci dgos// (D.84a-b, P.80a-b)
- ②4 mtshams med pa lnga byas pa yang nam par thar bar 'gyur na // sdig pa chung du byas pa nam^s lha mos kyang ci dgos//
(D.85b, P.83b)
- ②5 D.206a, P.243b.
- ②6 D.206a-b, P.244a-b.
- ②7 D.206b, P.244b.

- ㉞ D.206b, P.244b.
- ㉟ D.63a, P.68a.
- ㊱ 阿 (A) 字を觀想する事。
- ㊲ D.84a, P.81a.
- ㊳ D.207a, P.245a-b.
- ㊴ D.207b, P.245b.
- ㊵ D.207b-208a, P.246a.
- ㊶ D.208a, P.246b.
- ㊷ D.208a, P.246b.
- ㊸ D.208a, P.246b.
- ㊹ D.86b, P.82b-83a.